COLUMN

研究会だより

第4回 いろいろな学会

情報の分野で「学会乱立」という言葉が叫ばれて久しいが、確かに情報関連の学会の数は多い。別に学会の数が多いのは悪いことではなくて、その分野が活発なことを意味しているのだから、基本的には良いことである。しかし、研究者の人的資源を越えて学会の数が多くなってしまうことは非常に問題である。「金太郎飴」という言葉もよく使われた。金太郎飴はどこで切っても金太郎の顔が出てくるように、どの学会に行っても同じ顔が揃うということである。

ただし、それぞれの学会はそれぞれの経緯があって設立され、それなりの役割を果たしつつ存在しているのだから、いちがいに一緒にしてしまえ、というのは乱暴である。

情報処理学会とよく比較される学会に「日本ソフトウェア科学会」がある。情報処理学会と比べるときわめて対称的である。とにかくアカデミックに徹している。それは決して産業界で役に立たないというわけではない。もちろん、役に立たない研究も一杯しているが、研究に対する態度が真剣ということである。常にガチンコ勝負をしている。といっても、あまり説明になっていないが、要するに、世界レベルの研究を目指しており、日本的な「なあなあ」は許されない、ということである。

であるから、日本ソフトウェア科学会の論文誌である「コンピュータソフトウェア」のレベルは非常に高い。この論文誌に論文が載るのは大変に名誉なことといっていいだろう。世界的なレベルに達していなければならない。日本語の論文だから、日本でそれなりに評価できればいいじゃないか、というような「なあなあ」は許されない。

日本ソフトウェア科学会にも研究会はあるが、これも半端なものではない。だいたいの研究会は、年に一回のワークショップを活動の中心にしていて、それも必ず泊りがけで二泊三日で行われる。発表と質問は真剣勝負である。研究者生命を絶ってしまいそうな質問が飛び交うのである。その代わり、夜は徹夜の飲み会があったりする。

ある意味で、日本ソフトウェア科学会は日本の情報分野を代表しているといえる。「ある意味」とは、「ガチンコ」ということと「ソフトウェア」ということである。逆に、これがこの学会の限界でもあり、その規模にも反映されている。非常に残念ではあるが、日本ソフトウェア科学会は日本の情報技術の顔となるのは、現状では、なかなか難しいようである。

そのほかにも、人工知能学会はそれなりに大きいが、言語処理学会、ヒューマンインタフェース学会、日本バイオインフォマティクス学会、というような小さい学会がたくさんある。これらの学会は、日本ソフトウェア科学会のように、それぞれの個別の分野におけるアカデミックな活動を牽引している。はっきりいって、一介の研究者としてやっていくには、海外のメジャーな学会に入って、日本ではこのような小さい学会に入るのがいいに決まっているのである。

ただ、それではまずいのである、と私も含めて多くの人が思っている。他分野と拮抗しつつ、日本の情報技術の顔としてこの分野を牽引していく学会が必要なのである。要するに、日本的な「なあなあ」もちょっとだけ許しつつ、日本の情報技術全般の顔となるような学会がなくてはならないのである。そのような学会は情報処理学会しかない。

というのは実は正しくなくて、もう一つ、電子情報通信学会がある。詳しくはまた書くのだろうが、この中の「情報・システムソサイエティ」と情報処理学会が、2002年の秋から全国大会を統合して行おうとしている。これをFIT（Forum on Information Technology）という。この動きの下には、日本の情報技術の顔を作ろうという思いが込められているのである。

萩谷 昌己
（東京大学／調査研究運営委員会委員長）

（平成13年9月11日受付）